

倭寇対策と通信使の創設

～室町時代の朝鮮通信使～

二 谷 貞 夫*

1. はじめに

手元に朝鮮通信使に関する3冊の本がある。

- ① 辛基秀・仲尾宏編著『図説 朝鮮通信使の旅』明石書店、2000年
- ② 日韓共通歴史教材制作チーム『日韓共通歴史教材 朝鮮通信使－豊臣秀吉の朝鮮侵略から友好へ－』明石書店、2005年
- ③ 仲尾宏『朝鮮通信使－江戸日本の誠信外交』岩波新書、2007年

①は、釜山から対馬、肥前名護屋から京都、そして江戸、さらに日光へ、朝鮮通信使が宿泊・休憩等した場所を中心に歴史的な解説が付されている。

②は、広島県教職員組合と韓国全国教職員労働組合大邱支部が共同で作成した共通教材である。

③は、朝鮮通信使に関する本格的な概説書であり、朝鮮から最初の公式使節が日本を訪問して400年の節目に刊行された。

出版時期をみると、どれも2000年代。これ等の書籍は、日韓両国政府が共存・共栄をもとめた時期であり、また、民間交流も盛んに行われた結果である。

筆者は、1980年代に入り世界史教科書作成にかかわった。その時、「進出・侵略」書き替え教科書検定問題が発生した¹⁾。このことから、東アジア諸国の歴史教科書をはじめとして歴史教育実践に関心が深まり、1980年代後半以降、歴史教科書に関する日韓共同研究を始めた。そして、多くの韓国の歴史研究者・歴史教育者との交流を深めてきた²⁾。

通信使とは、「よしみを通じ、仲よくする」関係を維持しようとして派遣された人士である。日本の代表的な人物として雨森芳洲が脚光を浴びた。1988年、来日した韓国のノテウ大統領が演説でとりあげたことから、日本では雨森芳洲ブームが起きた。

私は、それ以前から、教材として雨森芳洲を取り上げていた。1980年には、NHK通信高校講座「李朝の繁栄」の取材で対馬の芳洲墓へ詣で、通信使の船が停泊した船江などを取材した。

芳洲は釜山で朝鮮語をマスターし、日中韓三国の言葉を使う外交官で、誠信誠意の交流を進めた人と番組で伝えた。今日、日韓交流を促進しようとする人々に

とっては、雨森芳洲の学習は必須だ。琵琶湖畔の雨森芳洲庵を訪ね、「誠信の交わり」を学んで欲しい。

ここで取り上げるのは、江戸時代の朝鮮通信使ではなく、室町時代の朝鮮通信使である。その時期に活躍した朝鮮外交官李芸（イイエ）は、話題になっている³⁾。

2. 倭寇対策

日韓の通信使は、14世紀、室町（足利）幕府と高麗王朝との間にはじまる⁴⁾。朝鮮半島と日本列島との交わりはもっと古い時代にはじまっている。14世紀半ばの東アジア世界では、モンゴル帝国が後退し、中国では元王朝に替わり、明王朝が成立。朝鮮半島では、高麗に替わり、朝鮮王朝が成立した。日本では、將軍足利義満の時代であり、室町幕府の勢いが最も盛んな時期であった。そして、1402年義満が、明の建文帝によって「日本国王」に冊封された。

これは、「倭の五王」武が中国南朝の宋の順帝から「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王」に封じられて以来、900余年ぶりのできごとであった。

14世紀後半には、東アジア世界には国際的な問題があった。それが、「倭寇」である⁵⁾。「倭寇」研究史によれば、倭寇には、「前期倭寇」と「後期倭寇」がある。ここでは14世紀から15世紀に盛んであった「前期倭寇」を取り上げる。「後期倭寇」とは、16世紀の私貿易を含む東アジアの大海賊集団倭寇の活動であり、王直はその首領として名を馳せた。

倭寇はその文字通り、日本人を中心とした海賊集団である⁶⁾。土地はやせ農業だけでは生きられず、漁業や私貿易にたよっていた九州沿岸の人びとや、対馬、壹岐の島民が海賊的行為におよぶことは以前からあった。この集団の行動が激しくなった時期は、鎌倉幕府が滅亡、南北朝の動乱、室町幕府成立という激動の時代だった。倭寇は、船団を組み、朝鮮半島沿岸や中国沿岸を荒らし、税として都に運ばれる品物や食糧を略奪し、さらに人身売買のために人をさらう行動にまでおよんだ。また、街を焼き払ったりもした。この倭寇制圧で活躍した將軍朱元璋が元朝をたおし、明王朝を起こした。しかし、倭寇による被害は大きく、明も高麗も室町幕府に取締りを要求した。親書を携え、派遣

*元上越教育大学

されてきたのが、通信使のはじまりである。

金西基著『物語韓国史』には、このような記述もある。

「1375年、非業の最期をとげた恭愍王の後を禍が継ぎ、第32代王となる。同年2月、通信使羅興儒が日本に出発。5月、藤経光の率いる倭人たちが多数投降してきた。7月、藤経光は海上に逃げて行った。藤経光は高麗の状態を内偵するために、偽装投降をしたようである。ちなみに、藤経光が逃亡してから倭寇の襲来が芽だって多くなっている。

翌1376年7月、倭寇が扶余・公州地方に襲来し、崔蚩將軍が撃退する。9月、古阜・泰山に倭寇が襲来し、全州を陥す。10月、日本人の僧、良柔が使臣として到着。同月、扶寧で倭寇を大破する。78年6月、日本から節度使源了俊が僧の信弘をともなって来朝し、かれらの手で倭寇が捕えられた。10月、李子庸を日本に遣わして倭寇の襲撃を止めさせるよう強く要望した。しかし、倭寇の襲来は絶えることなくつづいた。倭寇は日本のどこかを根拠地とする海賊で、鎌倉幕府も手の打ちようがなかった。頻繁に襲来する倭寇に高麗は手を焼いていた。1380年の8月、倭寇が尚州・善州などに火を放ち、9月、李成桂將軍が雲峰で倭寇を大破する。」⁷⁾

倭寇の発生には、その背景があった。13 - 14世紀の東アジアでは、国境や海を超えたヒト・モノ・情報の往来が、民衆レベルにまで及んで活発化し、それが中国・日本の内乱状況とあいまって、倭寇を発生させた。

高麗では、水軍の制や火薬局が新設され、その効力を発揮、1380年火薬船を倭寇の船団に突入させ殲滅することに成功した。以降、朝鮮の沿岸警備が充実され、倭寇は寄りつかなくなった。また、懐柔策も取られ、朝鮮時代には、降伏帰順、田畑家財を与えるなどの政策がとられ、投化・受職倭人が増えた。

倭寇に対する日本と韓国との対応が通信使往来のはじまりである。

3. 室町時代の通信使

江戸時代の朝鮮通信使は、仲尾宏作成の年表⁸⁾によれば、1607年にはじまり、1811年に終わる12回に及ぶ。1607年のはじまり、その朝鮮側の意図（聘礼名目）は、国交回復（倭情探索・被虜人刷還）を求めることである。

国交回復は、秀吉の朝鮮侵略後の交流再開を意味している。それ以前の交流再開も意味していた。『朝鮮王朝実録』によると足利將軍に対して派遣され、京都まで行き面談し帰国した通信使は、八回確認される。

朝鮮通信使といえど多くの絵巻にみられるのは江戸時代のものである。しかし、それ以前に通信使の往来はさかんであった。

柳鐘玄氏は、「壬辰倭乱以前の外交使節」⁹⁾で、次のようにまとめている。

1410年	正使・梁需
1420年	正使・宋希璟、副使・尹仁甫
1422年	正使・朴熙中、副使・李芸、書状官・吳敬之
1424年	正使・朴安信、副使・李芸、 書状官・孔達—崔古音—朴砧忱
1428年	正使・朴瑞生、副使・李芸、書記官・金克柔
1432年	正使・李芸、副使・金久岡、 書状官・房九成—金元
1439年	正使・高得宗、副使・尹仁甫、書状官・金礼蒙
1443年	正使・卞孝文、副使・尹仁甫、書状官・申叔舟

このなかで、3回（1428、1439、1443年）の使行は、通信使であり、他は、回礼使の名称が使用された¹⁰⁾。

以上の通信使のうちで、1422、1424、1428、1432年の4回にわたり李芸が加わり、1432年には、正使として京都を訪れている。

1422年、李芸は50歳。世宗大王は（1418～1450）朝鮮から日本の幕府、足利義持將軍に向けた回礼使の役を与え、代表団の副使として指名された。これまで、李芸の日本への渡航は、西国大名への2度与えられていたが、京都までは初めてであった。

世宗は在位期間中日本との平和的關係を維持するために、15回にわたり使者を派遣している。使行の名称も多様で、回礼使、通信使、賜物管押使、敬差官、觀察使などで、賜物管押使、敬差官、觀察使は、地方の豪族に派遣する名称で、回礼使、通信使は日本国王に派遣した使行の名称である。地方の豪族に派遣した理由は、幕府將軍が地方勢力を統制する力が弱いことを認識し、外交交渉相手に倭寇をおさえる事のできそうな地方の豪族たちをえらんだのである。

4. 通信使のシステム

倭寇が減少すると日本各地からの貿易を目的とする倭使の往来が急増した。そのため、いくつかの通行の制限、来泊の制限や入国証明の発行などが行われるようになった。ここに示すのは、一例である。1441年李芸が対馬敬差官として王命（世宗）をうけ、島主宗貞盛と約定した規約には、次のような条項があった¹¹⁾。

- (1) 朝鮮に派遣した使送船の種類と乗船人員数に対する規定
- (2) 定数内の使送倭人に対しては規定された食糧が給与されるが、定数外の倭人には給糧を許さないこと
- (3) 文引¹²⁾がない倭人は接待を許さない規定を再確認すること
- (4) 日本諸処の使送人が持っている書契は、たまに偽造

されたものがある。島主宗貞盛並びに各処から発給した書契を支給された人名をすべて書いて真偽を考証すること

- (5) 偽造した書契並びに書契を改変して持って行き、見せること
- (6) 陸地諸処の使送人と興利倭人らが持っている書契の真偽を分別せず、すべて文引を与え出送させることは便利でないから、今後は書契を検閲した後に文引を給与すること
- (7) 諸処の興利倭人（倭商）の留館期日に関する規定
- (8) 朝鮮に不法居住する倭人並びに被虜倭人らの送還問題
- (9) 宗貞盛以外の各人が発給する文引と書契は、これを厳禁すること
- (10) 対馬並びに諸処使送人が朝鮮に来るときは出来前に三浦に人員を均分させ、出発すれば、また書契内には出来る浦口名を記入すること
- (11) 宗彦七、宗茂直らが、宗貞盛の発給する文引を受けずに、使送人を送ることはよろしくない。今後としては宗貞盛の文引がない場合には接待を許さないこと

これらは、以降の日朝外交関係の重要な典拠となった。1443年には、「癸亥約條」が締結された。ここでは、従来の開港地、熊川の齋浦、東萊の富山浦、蔚山の塩浦を開港し、恒居倭人数を定め、島主宗貞盛が送る歳遣船50隻と朝鮮から送る歳遣米200石に限定する内容だった。朝鮮王朝は、対馬の政治、経済的な安定こそが、倭寇の再発を防ぎ、日本との外交関係を維持できると捉えていた。

日本側に対して派遣は、室町幕府、在京有力守護（大内氏、少弐氏）、九州探題宗氏本宗家、対馬諸氏などに限ること。これらは、申叔舟¹³⁾『海東諸国紀』¹⁴⁾に記されている。倭寇が沈静した。

日本側には、偽使の問題があり、取り締まりは室町幕府の仕事であった。

幕府は外交業務を京都禅宗五山派の僧侶に委託していた。それは偽使勢力に付け込まれる原因であった。当時の外交文書は漢文で作成され、その書式には礼儀作法があり、かなり高度な教養が求められ、使節として派遣される人物も、漢文による筆談や漢詩の交歓などが必要であった。そのため室町幕府は国書の作成や朝鮮に赴く使節の編成などすべて五山派僧侶たちに頼っていた。これは偽使派遣の障壁でもあったが、五山僧に、国書の改ざんを頼み、偽使派遣には都合な手段でもあった。こうして、幕府以外の諸勢力も偽使化を配出しやすい状況にあった。日本側の諸勢力の通交の多くは博多・対馬・薩摩商人などの媒介者が請負い行われた。これらの中間媒介者が名義人の死亡を隠し通交を続けるなど偽使化をはかった。

そこに、「日本国王良懷」の存在を忘れることは出来ない。明の洪武帝が日本に朝貢と倭寇の禁圧を求め、1368年から3回も使者を派遣した。2回は賊に殺されるなど失敗したが、3度目は成功した。相手は大宰府を支配していた懐良親王（南朝の創始者、後醍醐天皇の皇子）であり、征西将軍宮とよばれ九州を制圧していた人物である。大宰府は、古代以来の日本の外交の窓口であった。懐良親王は、「日本国王」の資格をもち、倭寇禁圧の実力を持つ人物であった。一方、九州平定を目指す足利義満は、今川了俊を九州探題に任じ、1372年には、了俊が大宰府を攻略した。その結果、外交上の混乱も生じた。懐良親王を日本国王に封じる洪武帝の詔書を携えた明使が博多に到来した際、了俊は彼らを博多の聖福寺に拘留した。しかし日本の事情を知った明使は大宰府を失った征西府ではなく、北朝側との交渉に切り替え、翌年京都に上洛した。義満は、明使を帰国させる際に、日本からの使者を同行させ、被虜人150人を送還した。室町幕府最初の遣明使であった。混乱というのは、例えば、義満が「征夷大将軍源義満」の名義で使者を送ったが、拒絶されている。一方、「日本国王良懷」名義の表を奉って明に入貢する使節が頻繁に往来していた。

5. 勘合船貿易

室町時代の日明貿易は、勘合船貿易とよばれる。略して勘合貿易である。貿易の際に、倭寇と区別し正式な遣明使船である事が確認できるよう勘合（写真図1）を使用した。明王朝は、伝統的な中華思想イデオロギーから冊封された周辺諸民族の王が大明皇帝に朝貢し、明皇帝が数倍の価値ある頒賜物に対してその返礼の形で授ける形式の貿易だけを認めていた。明王朝は、自国の商船が自由に外国へ渡航することを禁じていた。勘合船による貿易が唯一の合法的なものであった。進貢貿易、公貿易、私貿易の3種だが、日本船が勘合を所持し、明の港に入港し行方。進貢貿易は、日本国王が明の皇帝に貢ぎ、皇帝から頒賜に預かる。これを貿易といえるかどうか。しかし、室町幕府将軍が明皇帝から「日本国王」の冊封を受け、明皇帝に対して朝貢する形式であった。日本国内の支配権確立のため豊富な資金力を必要としていた義満は、名を捨て実利を取った。馬、太刀、硫黄、瑪瑙、金屏風、扇、槍などを進貢し白金、絹織物、銅銭などが頒賜された。公貿易では、幕府の貨物、遣明船船主の貨物、

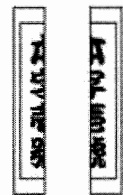


図1 勘合（本字勘合）
（出典：サイトの勘合符
<http://image.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E5%8B%98%E5%90%88%E7%AC%A6>）

搭乗する客商や従商人の貨物であった。これらの価格は、北京に送られて決められることが建前であり、取引された。取引の品は、蘇木、銅、硫黄、刀剣類が中心で、対価としては銅銭と絹や布が用いられた。日本国内で銅銭（永楽通宝）が取引につかわれたのも日明貿易の結果であった。私貿易には、寧波（ニンポー）の牙行、北京の会館、北京から寧波への帰途上、の3種であった。私貿易では、日本へ生糸、絹織物、綿糸、綿布、葉種、砂糖、陶磁器、書籍、書画、であり、さらに銅器、漆器など調度品であった。日明貿易がもたらした利益は具体的には不明であるが、宝徳年間に明に渡った商人楠葉西忍¹⁵⁾によれば、明で購入した糸250文が日本では5貫文（＝5000文）で売れ、反対に日本にて銅10貫文を1駄にして持ち込んだものが明にて40-50貫文で売れたと記している。なお、遣明船は、応永八年（1402）が第1回の出発年で、最後が天文十六年（1547）の出発年である¹⁶⁾。したがって、日明貿易は約150年間の間に19回行われたことになる¹⁷⁾。

6. おわりに

日明貿易が遣明船によって行われた。日朝貿易は通信使によって行われた。それは、室町時代にはじまる通信使によるもので、日本と朝鮮との公的な適切な交流は、江戸時代を迎えて、仲尾宏の言葉を借りれば、誠信外交である。その誠信外交の代表的な人物が、最初の朝鮮通信使李芸によって築かれ、江戸時代に活躍した雨森芳洲に引き継がれたといえよう。今日の国際関係をいかに平和的な関係に保つかは、国家間の外交交渉であるが、こうした歴史的な交流である通信使を振り返り、欧米型の近代的外交交渉に、今一度、前近代の東アジア世界で行われていた通信使外交から教訓を引き出してみる必要があるのではないだろうか。法治であるとともに人治であり、誠信の交わりであった。

追記 この報告は、文科省科学研究費補助金「国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発」（研究者代表高吉嬉）の一部である。

註

- 1) 1982年5月検定に提出した実教版『高校世界史』が、提出本の侵略を進出への検定意見が出され、最初に問題となった。この経過等の内容に関しては、鈴木亮『大きなうそと小さなうそ 日本人の世界史認識』（ほるぷ出版1984年刊）参照。
- 2) 1988年度文部省科学研究費補助金（海外学術研究）を受け、スタート。「日本国と大韓民国の歴史教科書叙述に関する基礎的研究」報告書（1989年3月刊）では、日韓歴史教科書の歴史認識の相違をまとめた。この交流が両国間民間教科書研究の最初であった。
- 3) 嶋村初吉編著・訳『玄界灘を越えた朝鮮外交官 李芸 室町時代の朝鮮通信使』明石書店、2010年刊、金住則行『李芸 最初の朝鮮通信使』河出書房新社、2011年刊。本稿は多くをこの二著に拠っている。
- 4) 1367年、金逸を正使とする三十余名の一行が出雲を経て京都に入った。
- 5) 用字例は、古代にまでさかのぼる。また、日中戦争の日本軍にも使われるが、歴史上の概念としては、14 - 15世紀の前期倭寇と中国大陸・南海方面を中心とした後期倭寇とに用いられる。
- 6) その構成員は、日本人のみの場合、高麗人・朝鮮人を含む場合、高麗人のみや朝鮮人のみの場合など、時代がさがると変化している。しかし、最初のころは「三島の倭寇」といわれ、対馬・壱岐・肥前松浦地方の住民が貧しく、海賊と化したと考えられている。
- 7) 金西基著『物語韓国史』中公新書、1989年、pp.247 - 248。
- 8) 朝鮮通信使聘礼年表、辛基秀・仲尾宏編著『図説朝鮮通信使の旅』pp.122 - 123。
- 9) 嶋村初吉編著・訳『玄界灘を越えた朝鮮外交官李芸一室町時代の朝鮮通信使』明石書店2010年刊、p.19。
- 10) 前の羅興儒らが室町幕府に倭寇禁圧を要請したのは、通信使であり、この名前の初出は『高麗史』日本伝で、一例のみである。
- 11) 前掲嶋村書 pp.114 - 115。
- 12) 対馬島主文引 対馬島主宗氏が発給する渡航証明書。
- 13) 申叔舟（1417 - 1475）日本語、中国語など他国の言語にも通じて外交官として活躍。1443年（世宗25年）には通信使の書状官として日本に赴いた。
- 14) 現在、田中健夫訳注『海東諸国紀—朝鮮人の見た中世の日本と琉球』岩波文庫がある。
- 15) 父は天竺人の「ヒジリ」。インド、ジャワ、あるいはアラビア出身。京都に居住。本人は幼名はムスル。俗名天次、西忍は出家後の号。もとは「天竺」を姓とした。
- 16) 『国史大辞典』遣明使、勘合貿易などの項による。
- 17) 関周一「明帝国と日本」、『日本の時代史』11、pp.98 - 140。